

千葉県高等学校教育研究会学校図書館部会主催「司書ならびに図書館関係職員研修会」
(2004-7-27：千葉県教育会館) 講演録*

幸も不幸も図書館員次第

東 史

【講師紹介】

東 史 (ひがし・ふみ)
山口県防府市生まれ
尾道短期大学国文科卒
現在は東京大学大学院数理科学研究科図書室勤務

[図書館映画関連活動]

・月刊『図書館雑誌』（日本図書館協会）に「映画の図書館・図書館の映画」と題した評論①～⑤を発表

- ① 1997年1月号 (vol. 91 no.1)
- ② 1998年2月号 (vol. 92 no.2)
- ③ 1999年4月号 (vol. 93 no.4)
- ④ 2000年6月号 (vol. 94 no.6)
- ⑤ 2002年1月号 (vol. 96 no.1)

・第三回図書館総合展（2001年11月）にて講演（『図書館万華鏡—スクリーンに映されたさまざまな図書館の魅力』）

[その他]

- ・植物画に詩を添えた独自の植物詩画個展を1998年より開催
- ・月刊新聞『オートキャンプ』に1997年11月～2004年1月まで植物エッセイ連載
- ・文イラストともに手書きの個人誌『道草だより』を発行（隔年程度、現在10号準備中）

【講演内容】

こんにちは。東と申します。現在、東京大学大学院の数理学科図書室に勤めています。ここは所蔵分野が限られた専門図書館と言えますが、利用者の規模としては学校図書館に近いと思います。

今日の研修のテーマは「楽しい読書の工夫」ということで、集まっていらっしゃるのは高校図書館の方達と伺っております。私自身は学校図書館に勤めたことはありません。東大の前は学習院の大学図書館でした。ですから学校図書館や公共図書館の体験談をお話することは出来ないのですが、映画の中の図書館を通じて語って行きたいと思います。

*『高校図書館』（千葉県高等学校教育研究会学校図書館部会）No.42（2005.3.31）に掲載予定。

個人的に言えば私自身が図書館の大ファンで、色々なことを調べるのによく利用しています。

1. 映画の中の図書館

映画の中には意外と図書館の出る場面があります。少しでも図書館が出てくる映画(Libcinema=Library Cinema)について情報交換しているメールリスト(Libcinema Mailing List)があって、私はそこに参加して情報を得てきました。図書館が出てくると言ってもほんの一寸しか出てこないものもあり、見応えがあるものもありで千差万別。でもそれらを網羅して見ていくことで改めて分かってくることも多く、様々な発見がありました。

今日はその中でも出来るだけ趣旨に添うような、子どもと図書館の話を用意してきました。高校図書館も出てはきますが、背景としてちらり登場という程度。高校図書館が主要な舞台となる作品は、残念ながらあまり記憶にないですね。

そんなわけで今日お話するのは、もう少し幼い子どもたちと図書館との関わりです。誰でも最初は幼い子どもですし、図書館との最初の出会いがその後を決定してしまうという意味で大変重要なことだと思います。その際の図書館司書の対応の差で、こんなにも不幸だったり、逆にこんなに良い関係が築けたりということをご紹介します。

その他にも映画の中で古今東西の色々な珍しい図書館が、こんなふう描かれているということも、画面のスライド写真をお見せしながらお伝えしましょう。

映画の中に図書館が出てくるのは、主人公が過去の事件を図書館に行き調べている場合が多いです。もっとも最近は様変わりしていて、机の上のパソコンで検索するだけで図書館には行かない場合も増えましたが。

学生や社会人が図書館で勉強するという場面もよく見ます。彼らが一所懸命やっている姿はけなげで、図書館の存在意義を感じます。男女の出会い、恋の始まりの場として描かれることもあります。古いところでは『ある愛の詩』(1970 米)の有名な大学図書館での主人公たちの出会いなど。また心の安らぎを求めて訪れる場合もあります。居場所のない人たちが、心地よい空間、穏やかに過ごせる場所として図書館にやってくるような。ざっとこのような例が図書館の肯定的な描かれ方ですね。

反対に図書館が否定的・揶揄的に描かれることもあります。特定人物の貸出記録を調べる場面など、本当はあってはならないのですが出てきますね。静かな館内で大声を出したり本をバーンと落としたりして、館内の注目を浴びるのは図書館場面の定番とも言えるものです。

図書館は本来静寂、整然、神聖の場というイメージがあるからこそ、それが破られるインパクトをねらっていると思うのです。たとえば『ゴーストバスターズ』(1984 米)の幽霊騒ぎで目録カードが飛び散ったり、『何か道をやってくる』(1983 米)の老図書館員に向かって、手にした本を1ページごとに破りながら魔物が近づいてくるところなどスリリングです。でも本を破ったりカードをぶちまけたりという場面は、見ていて結構辛いですね。だっていつも修理してる側ですから。見せつけられると心臓に悪いです。

書架間での密会やきわどいラブシーンなど挑発的な作品もあります。学校図書館などのほのぼのしたラブシーンなら肯定的だと思うのですが、知識にかこまれた場所でも

ないことをしておりますと開き直るかのような暗いイメージの作品も。時には本をめぐる殺人事件の舞台にもなります。事件の鍵をめぐる一冊の本だとか、図書館に倒れている死体など、この場合の図書館は迷宮めいた密室として描かれているようです。

2．映画の中の図書館員

パソコン検索が気軽に出来る今の時代に、人は何故図書館にやってくるのか。そこに専門の知識をもつ図書館員が居て、人と資料をつなげる役割を果たしているからではないかと思うのです。場の雰囲気を作るのはやはり人間です。

次に図書館員が誇りをもって仕事をし、的確に対応する有能者として良い描かれ方をしている作品をいくつかご紹介しましょう。

『太陽雨』（1987 中国）は機会があれば是非ご覧いただきたい作品です。第二の香港と言われる深圳（しんせん）という中国の大都市の公共図書館がたっぷりと出てきます。ヒロイン劉亜曦（リウ・ヤーシー）はここに勤める図書館員なのです。

（・印はスライドを見ながらの説明）

- ・「静」という字が壁に貼られている閲覧室の様子。
- ・カウンターのペンシル型スキャナーでデータを読み取っているところ。すでに機械化されているわけです。1987年当時としては大変進歩的。当時私の自宅近くの区立図書館はまだブラウン式でやっていましたね。
- ・開館前の配架作業から閉館間際の片付けまで、地道な作業もきちんと描かれる。図書館映画の中でもこういう丁寧な描写は稀です。普通はせいぜいカウンターでの貸出か書架間に立っていることで記号的に表すものが多い。
- ・踊り場のある大きな階段やBDSなど、近代的な新しい建物であることが随所に映されています。中国の中でも当時最先端の図書館なのでしょう。

ヒロインは清楚な感じのよい女性。真面目な性格ですがなかなかセンスもよく、都会でのシングルライフを楽しんでいるように見えます。利用者にも優しく接していて、彼女に好意を持って通ってくる男性もいるほど。向学心を失わない勉強家でもあり、夜学に通ったり、省の図書館学の講習会にも参加を希望したりで感心してしまいます。ストーリー上では色々ありますが、図書館員としての姿にはとても好感を持てます。

次は『Desk Set』（1957 米）。日本で劇場公開されたことはありませんが、元気な図書館員が描かれたことで有名な作品。日本では近年『コンピュータとミス・ワトソン』の邦題でCS放映されました。舞台はテレビ局の中の参考図書室。ここで働くリファレンサーの室長ミス・ワトソンが主演。演ずるのは名女優キャサリン・ヘップバーンです。

- ・参考図書室の職員は女性4人。年若い部下に指示を出している場面。ベテラン司書の室長の頭の中にはリファレンスブックのあれこれがすっかり入っていて、質問には常に的確に対応します。
- ・電話リファレンスが主な仕事。かかってきた電話を肩にはさんでメモを取り、さっさと参考図書架に急ぐ颯爽とした姿。流れるような手際の良さ。
- ・上層部の決定で巨大コンピュータが導入されることになり、リファレンサーの一人が解雇を予想して悲観している場面。でもミス・ワトソンは仕事に対して強いプライドを持つ

ていて、「機械に私たちの代わりは出来ない」と励まします。

・参考図書室でのクリスマス・パーティ。ここでもコンピュータ導入で他の部署でクビになった人たちの噂話。しかし画面は色とりどりの女性たちのドレス姿で華やかです。ミス・ワトソンはパーティだけでなく常に格好良い女性。年齢を感じさせない着こなしの上手さ。ファッション映画としても楽しめます。

・壁一面の巨大コンピュータが映し出される場面。この作品はIBMが製作に関わっているの、当時最先端の機械の宣伝も兼ねているのでしょう。昔の機械類は何でもとかく大きかったものですが、それにしてもこの大きさ！壁一面が全部隠されてしまって、部屋の雰囲気がからりと変わってしまいました。機械を動かすためにやってきたオペレーターはキーワードを打ち込むことが出来るだけ。慣れない質問を受け、スペルを間違えて大混乱になる。それまで様子を見ていたリファレンサーたちが勝利の笑みを浮かべ、それとばかりにかかってくる電話に飛びつくのは壮観です。彼女たちは長年の経験で質問の流れがよく分かっているのです。

・ミス・ワトソンはとても聡明な人なので、臆することなく自ら機械検索を試みます。彼女らはコンピュータと共存できるだろうことを思わせる大団円。気持ちのよい幕切れです。

次は『ショーシャンクの空に』（1994 米）。アメリカの刑務所図書館が出てきます。余談ですがアメリカには図書館映画がとても多い。製作映画数自体が多いのも理由のひとつですが、アメリカが図書館先進国であることもそのひとつでしょう。公共図書館だけではなく様々な種類の図書館、たとえばこうした刑務所図書館もたくさん登場します。

図書係の囚人がブックトラックを押して檻の前の通路を通り、貸出と返却を行う場面がありますが、『アルカトラズからの脱出』（1979 米）という作品ではクリント・イーストウッドがこうした図書係を演じています。

この作品はスティーヴン・キング原作の傑作。キング作品にはもともと図書館が登場するものが多いですが、ホラー以外の作品で言えば『スタンド・バイ・ミー』（1986 米）と並ぶ名作だと思います。とても見応えがある。簡単にあらすじを言いますと、主人公アンディは無実の罪で収監され、最初は荒くれ者たちにリンチなどを受けて悲惨な目にあうのですが、インテリながら肝の据わった不思議な雰囲気の人物で、段々と認められてゆきます。もともと銀行の副頭取だったこともあり経理に明るいことを買われ、所長に頼まれて書類作成を手伝う傍ら、刑務所図書館の図書係になるのです。

・はじめてアンディが図書室に来る場面。古ぼけた雑誌くらいしかなく、がらんとした物置のような感じの部屋。

・長く図書係をやってきた老囚人ブルックスとの会話。本の配達だけでそれほど面白みがある仕事でもないと思懐するブルックス。「本に予算を割く所長はいない」とあきらめ気味に語りますが、黙って聞いているアンディには思うところがあります。

・アンディは押しの一手で州議会に何度も何度も予算請求の手紙を出し、ついにそれが認められます。予算がつくとそれを効率的に使い、中古レコードなども含めて様々な資料を買い揃えます。

・図書室の改装。棚も新たに入れて生まれ変わっていく部屋。彼の行動力に他の囚人たちも巻き込まれ、生き活きと働いています。場の空気そのものが変わってゆく感じ。

・アンディが入ってきた本を分類して皆で配架する場面。本のことなどまるで知らない囚人たちにとっては、有名作家も名作も未知の言葉ばかり。大作家デュマの名前の読み方も分からず、『岩窟王』のタイトルをたどたどしく読みあげ、アンディから「脱獄の話だぞ」と教わると「教育図書に分類すべきだ」と冗談も飛び出します。

・すっかり立派になった図書室。イヤホンで最新の音楽も聴けて、冒頭の古ぼけた部屋とは別世界。心の自由と希望が囚人たちの顔も変えてゆくのです。なお、老ブルックスはある時恩赦で外に出ますが、うまく社会復帰できず自殺してしまいます。この刑務所図書室の表示板には「ブルックス・リトレン・メモリアル・ライブラリー」と刻まれ、長く図書係を勤めたブルックスを偲んでいます。

『ロレンツォのオイル』（1992 米）は実話を基にした難病物語。ある夫婦の一人息子が男の子しかかからない難病になり、どんどん衰弱して死を待つしかない状態になってしまう。医者にも見放されてしまいますが、この両親は決してあきらめない。どこかに解決策、突破口がないかと探し回る。それまで医学の専門知識もなかった二人が国立保健研究所図書室などに通い詰めてとことん調べ抜く。その前のめりな一途さが圧倒的な作品です。

・母親がマイクロリーダーで医学論文を見ている場面。ついに手がかりを発見する緊迫した場面です。母親役を演じるスーザン・サランドンの、画面を見つめる大きな目の上下左右の動きがすごい！この図書館は天井が高くとても立派です。ちなみに画面に見る西洋の図書館を見ていると、以前はお城や大邸宅だったのではないかと思われるような作りが多い。天井が高い分手暗がりになるせいか、スタンドライトの多さも印象的です。

・司書が父親に何を探しているのか聞き返す場面。病気のことについて朝から晩まで必死にさがしている父親の姿は、おそらく他の利用者から見れば常軌を逸しているでしょうが、この司書は彼をリラックスさせるような優しい態度で聞いてあげます。気持ちに迫いつかなくて先走る説明と要求を理解し、資料を探してきます。

・資料を探して持ってきたところ。「ありがとう。さっきは騒いですまなかった」と詫びる彼に返す言葉が粋です。「いいのよ。あなたイタリア人でしょ」、と。この父親はイタリア系なんですよ。身振り手振りが大きくて、わわわっと興奮してしゃべる。それをよく分かっていて「Oh, you are an Italian」と笑みを残して去ってゆく。良いですね。「うるさいから出て行きなさい」と言うのではなく、利用者が本当に求めているものをきちんと聞き取って探し出してくれる彼女は、素晴らしい図書館員だと思います。

さて素敵な図書館員が出てくる作品をいくつか紹介してきましたが、次は反例として嫌な図書館員が登場するものを。

『ソフィーの選択』（1982 米）は、ヒロインのソフィーを演じたメルル・ストリープがその年のアカデミー主演女優賞を取ったことで知られています。ソフィーはユダヤ系ポーランド人。ナチスに迫害されて収容所に入れられ、子どもからも引き離されて非常に辛い思いをしました。その後アメリカに渡り、大学で学ぼうとしている。最初にお見せするのはエミリー・ディキンソンの詩について調べるため大学図書館を訪れた場面です。

・高いカウンターから見下ろす男性司書。英語に不慣れなソフィーがディキンソンではなくディケンズとメモしていたため、「そんな女性詩人は存在しない」と断定し、調べようともしません。

・彼女はなおもスペルを確認しようとしませんが男性司書は無視して取り合わない。それ以上調べようもないソフィーはショックでその場に倒れてしまいます。色々辛い体験をしてきた彼女は心身ともに弱っている。せつかく学ぼうとする彼女に追い討ちをかけるようなむごい仕打ちですね。

『フィラデルフィア』(1993 米)は、有能で前途有望だった若手弁護士ベケットがエイズに侵されていることが分かり、解雇されることから始まります。

・解雇の不当を訴える裁判のため、法律図書館で調べ物をしているベケット。病気の症状が出始めて、少しやつれた感じを受けます。

・男性司書が頼まれた資料をかかえて彼の席にやってくる。 「H I Vの差別に関する項目がありました」と、周りの人にも聞こえるように言います。ベケットに周囲の視線が集まる、あってはならないプライバシー侵害の場面。

・さらに司書はベケットに個室利用をすすめます。やんわりと周りの邪魔だと言っているかのよう。彼は毅然としてこれを拒否しますが、なおしばらく席のそばで彼を見つめていて圧迫感があります。嫌な感じですね。

さて今までご覧いただいたように、図書館員の肯定的イメージをあげるなら親切、知的、穏やかである等。否定的なイメージでは内向的、お役人的、偏屈である等。これらは極端に強調されて描かれることも多いです。道化役ですね。女性のステレオタイプはひつつめ髪、メガネ、独身。幸せな家庭を築けないから司書をしているという、いわゆる負け組のイメージと言えるでしょうか。

そうした薄幸のイメージで有名なのは『素晴らしき哉！人生』(1946 米)。主人公の男性が、もしもこの時点で彼が死んでしまったらどういうふうになっているかという状況を天使に見せられる。その架空の世界では彼がいないせいで、本来なら彼の妻となる女性は結婚も出来ず図書館司書として働いているんです。メガネをかけ、やぼったい感じでいかにも不幸そうなオールドミス。ちょっとあんまりですね。

向田邦子さんの傑作『阿修羅のごとく』は最近映画化されましたが(2003 日本)、やはりきつい感じの図書館員が登場します。この四姉妹の三女役は映画では深津絵里さんが演じて、真面目でありながら愛嬌も感じられました。でも1979年放映のTVドラマでこの役を演じたいしだあゆみさんはこわかった！ひつつめ髪できつい独身女の典型的な姿。だいたい図書館員と言えば地味なイメージで、華やかな友人や自分自身の華やかな変身姿との対比に使われることが多いんです。

『さよなら、こんにちは』(1990 日本)にも問題のある台詞が。別の場所で知り合い、図書館で再会する男女を佐野史郎さん、南果歩さんが演じていますが、実は彼女はその図書館の司書。「君が図書館司書だったなんて」と彼が驚くと、彼女は「がっかりした？」と応じるんですよ。この弱気な発言は何？そんなに恥ずかしい職業なのかと彼女を問い詰めたくなります。

『ビューティフル・ライフ』(2000 日本 TVドラマ)は、木村拓也さん演ずるカリスマ美容師と常盤貴子さん演ずる車椅子の司書との恋愛ドラマでした。やはり華やかな美容師と地味な図書館員との対比が感じられ、「私はしがたい図書館司書」という台詞も出てきました。また未見ですが『素顔のまま』(1992 日本 TVドラマ)も、安田成美さんの図書館

員と中森明菜のダンサーとの対比の妙があったようです。

また、女性図書館員はまだしも堅実な仕事として描かれているのに対して、男性図書館員の方は情けない描かれ方が多いようです。往々にして挫折感や不安を抱え、生気に乏しい小心者扱い。…ごめんなさい、会場にいらっしゃる男の方は気を悪くしないでくださいね。そういう作品が多いということだけで、私がそう思っているわけではないですから…

これは図書館の仕事が営利的ではないからだと思うんです。大きな仕事で世の中を動かすのが男らしいという価値観のもとでは、そうした仕事と関係ない者はあまり価値がないと見なされるんですね。人との関係を築くのが苦手な、世俗から浮いている奴という捉え方もあります。

『ガス人間第一号』（1960 日本）の主人公は図書館で働いている男性で、「こんなところに勤めていたらただ青春をすり減らすばかり」と鬱屈しています。『大人になれば…』（1967 米）はニューヨーク公共図書館がふんだんに出てくる興味深い作品で、主人公は図書館で働く若者ですが、彼はラブレターの中で自分のことを「図書館勤めのとりえのない男」と表現するのです。どうしてそんなに卑下するのでしょうか。『ペンギンズ・メモリー/幸福物語』（1985 日本）は、サントリーCMで有名になったペンギンキャラクターたちによるアニメーション作品ですが、放浪の旅をしていた主役の青年が田舎町の図書館で職員募集に応じた時、館長から「どうしてまたこんな地味な仕事を」と聞かれます。館長みずからそんな言い方をしなくても。さらに「給料はあまりよくありませんぞ」との追い討ち。それでも本好きの彼はそこに勤めることを決めるのです。どうもこのような描かれ方がほとんどですね。

3. 子ども利用者への対応の明暗

図書館司書の拒絶によって利用をはばまれる子ども、逆に親切な対応で伸びてゆく子どもなど、印象的な作品をいくつかお見せします。

『リトル・ダンサー』（2000 英）はバレエダンサーを目指す少年の話。主人公ビリーが生まれ育ったのは炭鉱の町。男の子は皆将来が炭鉱夫と決まっているような町で、奇しくもバレエに目覚めてしまうのです。

・ダーラム郡の移動図書館（ブックモバイル）。ビリーがやってきてダンスの本を抜き出し眺めています。

・彼の後ろから突然「それは駄目」と声をかける女性司書。「小学生は借りられないの」とたたみかけます。でも何故小学生が借りてはいけないのか説明はありません。ダンスの本だからいけないのでしょうか。本に対して年齢制限を設けているならば理不尽な話です。ビリーは純粋に踊るための参考にしたくて手にしていたのに。

話がちょっとそれますが、イギリスではとかく子どもを突きはなしているような印象を受けます。子どもというのは一人前になっていない未熟者という捉え方。たとえば『メアリー・ポピンズ』などを読んでいても、メアリーの子どもへの対し方は親身というわけではなく冷淡のように思えます。

『ケス』（1969 英）の主人公もビリーという少年。労働者階級の生活を淡々とリアルに描くことで名高いケン・ローチ監督の佳品です。少年の父は行方知れずで母は生活に投げや

り。年の離れた兄は彼に辛くあたる。辛い生活環境です。小柄で貧相なことから学校でもいじめにあっていて、まさに八方ふさがりの中を必死で生きている。そんな彼が心惹かれたのが偶然見つけたハヤブサ（英名 **Kestrel**=ケストレル）。作品タイトルはここから来ています。むつかしいと言われる餌付けについて調べようと図書館に行くのですが…

- ・図書館に入るなり入り口付近のカウンター職員から「会員なの？」と呼び止められる場面。

- ・この女性は「貸出は会員のみ」と規則をたてに少年の利用を断ります。身なりで判断しているふしもあります。

- ・利用したければ保護者の署名が必要だと言われます。父は蒸発、母は邪険という少年には望むべくもありません。やるせない顔をするビリー。

- ・ちょっと見るだけだからと食い下がる彼に浴びせられる決定的な台詞、「駄目よ。本が汚れて不潔になるわ」。これは残酷です！

余談になりますが、初期の児童図書館に深くかかわった図書館員アイリーン・コルウェル著の『子どもと本の世界に生きて』（1994 こぐま社）を読んだ時、本当に昔は子どもがお荷物扱いされていたのだなあと感じました。その当時は手垢で本を汚すからと、子どもの本はすべて黒い表紙で製本されていたとか。子どもが思わず手をのばしたくなるような綺麗な絵や淡い色彩など、まったく考えられていなかったのです。このあとビリーは本屋で必要な本を万引きしました。図書館で拒絶されたことは彼の心をどんなに傷つけたことでしょう。そこで親切にされていれば世界が広がったのに。痛ましくてなりません。

『ぼくは歩いてゆく』（1998 イラン）の少年の環境も悲惨です。両親が出生届けを出しておらず、教育も受けられない文盲のままアルバイトで家族を支える。これは実話を基にした作品で、演じているのは彼自身です。

- ・配達で訪れた図書館で、なんとか勉強したくて本を借りようとする少年。しかし「本が読める？」「読めるようになってから来なさい」と断られてしまいます。悲しいことに彼は子どもなので上手く状況を説明できません。彼が読み書きを勉強しようとして本を求めたことは、図書館の人に伝わらなかったのです。

分かっているならばここで何か手をさしのべてあげることも出来たのではと思います。可哀想です。ただ、この作品に出演した少年はその後監督の力添えで学校に通えるようになり、この境遇から脱することが出来たという後日談にはほっとします。

『**Human Comedy**』（1943 米）は日本公開されてはいませんが、図書館に行く少年たちが出てきます。原作はウィリアム・サロイアンの『人間喜劇』。原作に忠実に映画化されているので、この邦訳を読んでおけば英語のみのオリジナルビデオでも話はよく分かります。

- ・二人の少年が町の公共図書館に入ろうとしているところ。外観を見ると結構大きな図書館です。古い作品なので画面はモノクロ。

- ・このメガネをかけた年長の子どもがライオネル。手を引かれているのがユリシーズという近所の幼い子。実はライオネルは字が読めないのですが、それでも本を眺めるのが大好き。

彼はどうも町の子どもたちの中では味噌っかす扱いというか仲間はずれになっているような感じですが、被っている小さな丸帽子や服装から見ると、異なる文化背景を持っている

る移民の子なのかなと思われます。一方ユリシーズは幼すぎてまだ何も分かっていません。ユリシーズなんて大層な名前ですが、物語の主演であるお兄ちゃんの名はホーマーだし、ヘレンという女の子も出てくるし、要するに登場人物の名はホメロスのギリシャ叙事詩『オデュッセイア』が基になっているんですね。

・たくさんの本に感激したライオネルが書架をめぐっていると、それをいぶかしんだ年配の女性司書が「何をしてるの」と声をかけます。「本が見たい。全部見たい」と彼が答えると、「全部なんて無理。本は4冊までしか借りられないのよ」と、ちょっとかみ合わないやりとりになります。でもまあこの女性司書は割に親切なひとだったので一応理解してくれて、「ただ見ているだけでいい」というライオネルを追い出したりせず「好きなだけ眺めなさい」とそのまま行ってしまいます。

・「これも本、あれも本、素敵だな。なんて素晴らしいんだろう」と嬉々として書架を巡り続けるライオネル。聖地巡礼のような趣です。

・美術書を一冊取り出し、モナリザの絵を見てその美しさに感動します。「これが全部読めたらどんなに素晴らしいだろう」とつぶやきますが、本当に読めるようになったらいいなあ、と彼のために祈りたくなります。

『ブルックリン横町』(1945 米)も40年代の古い作品です。制作年はまさに第二次世界大戦が終わった年ですね。時代は貧しかったけれど一所懸命勉強しようというけなげさがあって、その時代のアメリカの純情を感じます。この作品の主演はフランシーという少女。アイルランド移民の娘で貧しい暮らしをしています、本が大好きでしょっちゅう図書館に通っています。

・フランシーは図書目録カードの著者名順に、図書館すべての本を読もうとしています。カウンターの女性司書に本を請求すると、小さな女の子が読みそうもない難しげな本のタイトル(『憂愁の解剖』)なので、司書がびっくりする場面。

・「あなたがこれを読むの？」と疑問に思って問いかけると、「順番に全部読むと決めたいんです。あらゆることを知りたいから」と、強い決意のまなざしを持って少女はきっぱり答えます。

実際、貧しい家の子どもにとって図書館は唯一の知識源、知の殿堂でしょう。黒人作家ジェームズ・ボールドウィンは、貧困家庭に育ちながらもニューヨーク公共図書館ハーレム分館に通い詰めて、あらゆるものを読んだという逸話があります(『ジェームズ・ボールドウィンの怒りの遍歴』1970 富山房)。

・女性司書は少女の決意を見て取って「わかったわ」と請求された本を出してあげます。この人の素敵なところは「もう一冊お持ちなさいな。『花の騎士道』面白いわよ」と、子どもが喜びそうな本を添えてあげるところ。少女の意思を尊重し、その上で思いやりを添えるのが素晴らしいです。

・本を受け取るフランシーの嬉しそうなこと。拒否されずにちゃんと借りられたし、親切におまけの本も添えてもらったし。この子は伸びるだろうな、とこちらも見ていて嬉しくなります。

この作品の原題は『A tree grows in Brooklyn (ブルックリンで育つ木)』です。繊細なフランシーが自宅近くの木が切られたのを悲しんだ時、父親がなぐさめて言う感動的な台詞

から来ています。「木は殺せないよ。誰が木を殺せるものか。あの下はセメントなのにそれを破って生えた。生きる力は誰にも止められない。鳥が歌うのだからさ。誰も教えないのに歌があふれこぼれおちる。木の芽はまたセメントを破って伸びるよ」。この父親の言葉がタイトルを象徴しているんですね。優しい父親や、親身になって考えてくれる学校の先生にはげまされ、少女は作家になることを決意します。そして見事作家になるんですね。この物語は劇作家ベティ・スミスの自伝的小説なんです。

『さよならコロンバス』(1969 米)の主人公ニールは町の図書館員。将来のことにしても恋愛にしても、どこか意志のはっきりしない頼りない感じの青年ですが、よく図書館にやってくる黒人少年にはとても親切です。60年代ですからまだまだ人種差別が激しく、他の図書館員たちは少年を邪魔者扱いするのですが、権威主義ではない彼だけは少年を何かとかばってやります。

ちなみにニールを演じたりチャード・ベンジャミンはちょっとミスター・ビーンに似た顔立ちかと思いますが(笑)、後には監督として『月を追いかけて』(1984 米)という作品を作っています。この作品にもやはり図書館が出てきて、なかなかの佳品です。

・少年はゴーギャンの画集が好きで、奥まった中二階のような場所の手すり近くに腰掛け、足をぶらぶらさせながら眺めるのがお気に入り。通りかかったニールは少年に絵のことを聞かれて丁寧に答えます。彼の立っている場所のほうが低いので、少年を見上げるような目線になっています。

・この場所は本に囲まれた屋根裏部屋のような雰囲気、少年はいつもこのあたりで同じ本を眺めています。多分あまり人目に触れず、すっぽり包まれているような居心地の良い場所なんでしょうね。この気持ちは分かります。書店や図書館などでも、奥までまっすぐ見通せるようなところより、ちょっと死角に入っているような場所は落ち着きますよね。まあ逆に死角の部分が痴漢行為など犯罪の場所として使われると困ってしまいますが。

・少年に貸出カードを作ることをすすめている場面。「利用カードを作れば毎日図書館にこなくても借りて帰ってうちで読めるんだよ」と教えてあげます。

・でも少年は「僕が嫌なの？ここが好き」と答えます。ここに居てはいけないのかと不安になったらしいのです。彼は本が見たいというだけではなく、この図書館に来ることが好きなんですね。図書館は彼にとって居心地の良いオアシスだったんです。

『マチルダ』(1996 米)の原作はファンタジー作家ロアルド・ダールの児童文学作品。主人公の少女マチルダは俗悪な家族の誰にも似ていない、突然変異の大天才。家庭には彼女の知識欲を満たせるようなものが何一つなく、本を読んでいるとかえって怒られる始末。知的虐待を受けているようなものです。そんなわけでマチルダはわずか4歳の時、自分でイエローページで探して公共図書館に出かけてゆきます。

・「子ども用の本はどこですか？」と受付の老婦人司書に尋ねます。小さな子どもですから受付はとても高く仰ぎ見られていますね。ここも天井が高く立派な建物。探すのを手伝いましょうかと申し出る司書に対し、「大丈夫。自分で探せます」と答えるマチルダはいかにも利発そう。

・さてこれが児童図書の本棚。立派でしょう。素晴らしいですね。壁にも綺麗な絵が描かれ、ふかふかした絨毯、気持ち良さそうな椅子。物語の中の世界のように。こんなに素

晴らしいのにどうしたのか他には誰一人いません（笑）。マチルダはこの貸切状態の素敵な部屋で本を片端から読んでいきます。本当に楽しそうですね。地獄のような家に比べるとここはまるで天国です。

- ・最初に会った司書は彼女の読書振りにすっかり感心し、カードを作れば図書館の本を何冊も借りられることを教えてあげます。

- ・なにしろまだまだ小さい子なので、本をたくさん手で持つことが出来ません。マチルダはひもで引っ張るおもちゃの車に本を乗せ、図書館と家を往復します。こうして彼女の知識は飛躍的に増えていきました。彼女はまさに図書館によって育てられ大きくなったのです。見ていて幸せな気持ちになります。

4. 映画に現れたさまざまな図書館

[ニューヨーク公共図書館]

さて、今日はスライドをたくさん用意してきましたので、他にも色々な図書館の姿をお見せしたいと思います。先ほども申し上げましたが、世界的に見て図書館が出てくる映画が多いのはなんといってもアメリカです。アメリカで作られている映画数自体が圧倒的に多いこと、またアメリカは図書館先進国で図書館が人々の暮らしに根ざしていることがその理由でしょう。

なかでもニューヨーク公共図書館は頻繁に登場します。先ほどあげた『ゴーストバスターズ』や『大人になれば...』の舞台もここです。最近公開された『デイ・アフター・トゥモロー』（2004 米）は未見ですが、情報によれば近未来に新たな氷河期がやってきて、皆で避難する場所として出てくるそうです。でも病人のために図書館の本を燃やして暖をとろうとする場面があるらしいんですね。なんて罰当たりな…そんな場面見たくないです！でも燃やそうとする人を司書がたしなめて、医学書を調べれば病の治し方も分かることなどを説くらしいのですが。まあ気を取り直してその他の登場作品をご紹介します。

『ティファニーで朝食を』（1961 米）はオードリー・ヘップバーン主演で知られているお洒落な作品。彼女が演じるホリーは男の相手をして生きているようなとらえどころのない女性ですが、同じアパートに越してきた新人作家ポールと親しくなり、二人で町へ繰り出します。「今日は初めてのことばかりでしょう」ということになって、ポールは彼女が一度も行ったことのないニューヨーク公共図書館に連れて行きます。

- ・彼女は何しろ図書館初体験者なので、ポールはカード目録の引き方、図書請求用紙への記入の仕方など、利用者教育よろしく事細かに説明します。ためしに彼の著作を調べ、カウンターに請求します。

- ・請求された本の用意が出来ると、申し込んだ番号順に「〇番さん」と呼ばれます。それを聞いて、「〇番、僕たちだ」と取りに行く。このあたりの手順は都立図書館などと変わりないですね。

- ・ホリーは本を書いた当人が隣にいることが自慢で、カウンターの女性司書に「この本を書いた人知ってる？」とはしゃいで話しかけますが…

- ・案の定「お声を低く」とたしなめられてしまいますね。先ほども言ったように、大声を

出して注意される場面は図書館映画の定番です。

『パーティーガール』（1995 米）の舞台はニューヨーク公共図書館の分館です。ちなみに分館は80以上あるとか。実際の撮影はお隣のニュージャージーの図書館だったそうですが、これは図書館映画として見応えのある、とても面白い作品です。

主人公のメリーはレンタルパーティ三昧で、薬物所持で捕まったりもする遊び人。保釈金を自分の名付け親で後見人でもあるジュディに出してもらいますが、このジュディは図書館長をしているベテラン司書。成り行き上メリーは彼女の図書館で働くことになります。

・人手が足りなくて困っている話を聞き、自分が手伝うと申し出るメリーですが、ジュディに「図書館学修士号を必要とする知的専門職よ」とぴしりと言われます。アメリカは図書館学のコース化がきちんとしているだけに、専門職としての誇りが高いんですね。

・こう言われたメリーはさすがにむっとします。「私は馬鹿で使えない？」と意地になり、かえって図書館勤めを固く決意してしまいます。

・彼女がやらされるのはカード配列、スタンプ押し、ラベル貼りなどの事務的な下働き。作業中に利用者の老婦人から「シュノキゲン（種の起源）はどこ？」と聞かれますが、それがダーウィンの有名な進化論の本だということがまったく分かりません。

・理解できないまま適当に「植物関係の雑誌ならあちらに」と答えてしまいます。これは新人にありがちな過ちで、私も身に覚えがあります。図書館員として聞かれたことに「分かりません」と答えるのが恥ずかしくて、つい適当なことを言ってその場をしのいでしまうんですね。

・ここにベテランのジュディ館長が現れ、にこやかにその本の正しい場所を案内します。そして「分からない時は正直にそう言いなさい」とメリーをたしなめます。利用者は誰が司書で誰が司書でないか分からない。図書館の人だと思えば等しく質問してくるわけだから、自分が分からなければちゃんとそう言って分かる司書に引き継ぐべきだと。間違った情報を伝えることは、利用者にも無駄な時間を使わせることになるからです。有名な「ランガナタンの図書館学の5法則」の第4法則<読者の時間を無駄にするな（節約せよ）>というのは、こういうことなんだと思います。

・こちらはまた違う場面で「なぜシステムを覚ええないの？」とメリーを叱るジュディ館長。メリーにまかせた分類記号がいつまでたってもでたらめで、心理学の本なのに文学に分類したりすることにご立腹なのです。怒られてふくれっ面のメリーはその夜やけ酒をあおりますが、そこで終わらないのが彼女のすごいところ。

・酔っ払った勢いで夜の図書館に入り込み、DDC（十進分類法）の本を読みふけてその夜のうちにその法則を劇的に理解します。ダンスミュージックにのり、山積みの本を踊りながら配架する姿は見もの。この夜彼女は仕事の面白さに目覚めたんですね。でも残念なことにはそれまで失敗続きだったので、ジュディ館長は彼女に見切りをつけてしまっている。単純な仕事しか与えなくなり、やる気まんまんのメリーの気持ちとすれ違ってしまいます。

・メリーが勝手に本を棚に戻した利用者に「でたらめに置かないで！」と怒っている場面。自分が分類法を理解したものだから、書架が乱れるのが我慢ならないんです。それまでの彼女のでたらめぶりを思うとたいした変化ですが、一所懸命な姿に微笑ましくなります。

・メリーはその後ふとした失敗がもとで解雇されてしまいますが、今度こそ本物の司書に

なろうと大学進学を決意します。この場面はこの図書館の同僚たちが進学相談にのっているところ。やれミシガン大がいいとかワシントンもいいとか、大学のコースについてアドバイスしてるのです。

ちなみにアメリカで初めて図書館学のコースを開いたのはコロンビア大学。DDCの作者デューイによる開設でした。先にお見せした『Desk Set』のミス・ワトソンは「コロンビア大学の司書課程に学んだの」と作中で語っています。

・ジュディに司書資格を取ると宣言し、再雇用を懇願するメリー。決意のほどをあらわすためか、司書の定番イメージ通りひつつめ髪、メガネ、地味な服装という姿に変身しています。それまでの派手でポップなイメージの彼女とはまるで別人のよう。

この作品は図書館場面が本当にしっかりと描かれています、それも道理でエンドクレジットを見ているとちゃんと専門家の監修を経ているのです。日本ではなかなか考えられないことでしょう。全体のリズムも良いし、一見の価値ある楽しい作品だと思います。

[古今東西の珍しい図書館]

今度は世界各地、過去と未来を織り交ぜて様々な図書館をお見せしてゆきましょう。まずは『薔薇の名前』（1986 仏・西独・伊）。中世の北イタリア僧院の文書庫が出てきます。原作はウンベルト・エーコ。記号論の学者によるものなのでかなり難解な作品とされています。この映画は3カ国の共同制作なのですが、舞台がイタリアにもかかわらず登場人物の台詞は英語で進行します。よく考えると妙ですね。

・この僧院は蔵書量が多いことで有名なのですが、禁書にからんで事件が起こります。大きな扉外にやってきた旅の僧と弟子が佇むところは、今見るとなんだかRPGの主人公みたいですが（笑）。

・これは多くの写字生たちが本を書き写している部屋の様子。斜めに傾斜した、設計図の作図台のような板の前で作業しています。広げた新聞の閲覧台のようにも見えますね。当時は副本を作るにはただひたすら写してゆくしかなかったわけです。

今度は一気に未来に飛びまして、『惑星ソラリス』（1972 ソ連）。宇宙ステーションの中の図書室が登場します。これはスタニスラフ・レム原作の哲学的味わいを持つSF作品。最近リメイクされたようですが、なんととっても映像詩人アンドレイ・タルコフスキー監督による本作は素晴らしいです。

ソラリスという惑星に行った宇宙飛行士の様子が皆おかしくなるので、調査のため新たに地球からソラリスに旅立つ宇宙飛行士。実はこの惑星は人の心のうちのイメージを実体化して見せる力を持っています。それで彼の前には別れた後自殺してしまった妻の姿が現れ、彼がどうあがいても去らない。なんとも不思議な独特の雰囲気を持つ作品です。

・これが宇宙ステーションの中の図書室です。作品としては有名でも、この場面の舞台が図書室であると認識してらっしゃる方は稀でしょう。でも見ていると確かに「では後ほど図書室で」というような台詞の後にこの部屋が出てきます。

・見ただけだと特に図書室らしく見えないかもしれませんが。ただステーション内の他の部分は病院めいているというか機械的でひたすら白っぽい世界ですから、この居間のような茶系の落ち着いた佇まいを見るとほっとします。テーブル、ソファ、壁の絵。冬景色の絵は地上のロシアを思わせますね。無機質なステーション内の、唯一有機的な感じを受ける

部屋です。

・これは無重力状態になって本などがふわっと浮遊する有名な場面。ここに流れるのはバッハのコラール「我汝に呼ばわる、主イエス・キリストよ」で、とても美しい場面です。

さて次は『ベルリン・天使の詩』（1987 西独/仏）。東西分断されていた当時のベルリン国立図書館がたっぷりと出てきます。現在は東西統一され、西のこちらは国立図書館の第二館となったようですが。

映画ではこの図書館にたくさんの天使たちがたむろして、人間たちを見守っている場面が出てきます。天使といっても一般にイメージされるような白い衣装と羽などではなく、皆黒いコートを着て静かに歩いています。カシエルとダミエルという天使が主に登場しますが、ダミエルは後にサーカスの女性に恋をして地上に落ち、人間になります。

・これが図書館の中です。仕切りがなくてスロープが多用されているため、閲覧室は広々と気持ちのよい空間。

・天使たちは書架の間、閲覧機の脇、手すり付近などいたるところに点在していますが、利用者たちもたくさん写されています。たとえばスカーフをかぶったトルコ女性はベルリン市内に多い移民の一人。

・上部の手すりから見下ろす一階の様子。天井の丸いライトが目立ちます。下にびっしり並んでいるのは書架の上についているライトです。踊り場のある大きな階段も立派。

日本の公共図書館は日曜の利用が多いと思いますが、ドイツでは安息日である日曜は休館日です。この映画の撮影は休館日である日曜ごとに行われ、まさに教会に通うようだったとヴィム・ヴェンダース監督は語っています（『天使のまなざし-ヴィム・ヴェンダース、映画を語る』1988 フィルムアート社）。図書館場面に流れる曲の名も「本でできたカテドラル」というのだそうです。

『シティ・オブ・エンジェル』（1998 米）は、この『ベルリン〜』のリメイク作品。物語の上ではロサンゼルス（街の名自体が Los angels=天使たち）の図書館ということになっていますが、実際にロケされたのはサンフランシスコ公共図書館です。中央は6階までの巨大な吹き抜けで、カリフォルニアの陽光が天窓から降りそそぐ近代的な明るい建物。

オリジナル作品に比べ細かい部分や雰囲気はかなり変わっていますが、天使たちが図書館にたむろしていること、主役の天使が人間の女性に恋をして地に落ちることなど大まかな設定は同じ。ここでは天使セスが女医のマギーを見初めます。落ち込んでいるマギーをはげまそうと、セスは自分のお気に入りの図書館の本を彼女の部屋にそっと置くのですが、彼女のほうは見覚えのない図書館の本があるのを不思議に思い、図書館に返しにやってきます。

・「誰が借りたかわかる？」とカウンター男性司書に尋ねると、彼は「名前は言えませんが、借りた日付だけなら」と答えます。プライバシー保護の原則がきちんと守られていることが分かります。

・セスとマギーは図書館の大階段のあたりで顔を合わせます。「失われた世代」の作家の特集コーナーが階段付近の書架に組まれているのです。大型書店のような雰囲気ですね。

・吹き抜け付近の円形の手すりに天使たちが集まっていっせいに下を見下ろしているところ。彼らの視線の先は図書館を出てゆくマギーとセスで、下にはBDSが見えます。それにし

でも黒いロングコートの男性ばかりがざっと打ち揃っているのは「その筋」の方々のよう
でいささかぎょっとします。

『ある愛の詩』(1970 米)は一世を風靡した恋愛映画ですが、主人公の男女が会おうのは
ラドクリフ女子大学図書館。貸出カウンターにいたのは学生バイトのジェニー。本を借り
に来たのが隣のハーバード大学の学生オリバー。苦学生のジェニーは相手をお坊ちゃん学
生と見て、つんつんとがった物言いをします。

・「ハーバード大学はうちの100倍も本があるわ」という台詞が出ていますが、これは
意識で本当は「おたくは500万冊もあるじゃない」と言っています。つまり何故わざわざ
こちらに借りにきたりするんだ、と突っ放しているわけです。

・これに対して彼は「ここは僕らも利用できるはずだ」と反論しています。隣り合う二つ
の大学が相互利用の協定を結んでいることがこの台詞から分かります。さらに彼が「頼む。
明日試験なんだ」と懇願するところを見ると、おそらくもう他の学生に借りられてしまっ
ているので切羽詰ってここに来たんでしょうね。でもまあ試験前夜に付け焼刃の勉強をし
ようとする彼のほうが悪いんじゃないかなと思います。

『永遠(とわ)の愛に生きて』(1993 米)は作家 C.S.ルイスの実生活を基にした伝記的作
品。彼はオックスフォード大学で教鞭をとっていたため、作中にも大学図書館が出てきま
す。

・堂々たる作りの宮殿のような建物。天井がとても高いです。閲覧机にずらっと並んだス
タンドライトも目立ちますが、これはかなり背の高いライトですね。白い笠の部分が座っ
ているルイスの頭の上あたりに見えます。

・こちらは別の机についている同僚の教授。かなりの皮肉屋なのですが、黒いローブをま
とっていかにもイギリス紳士といった風情です。

C.S.ルイスは神学者でもあり児童文学の名作『ナルニア物語』のシリーズで有名な作家で
すから、自宅も書斎など至る所に本が並んでいるし、はっきり言って本だらけの映画です
ね。ナルニアに関するエピソードなどもちらりと出てきて、ナルニアファンにはなかなか
嬉しい。それにしてもこの邦題は甘すぎです。原題は『Shadowlands (影の国)』。

大学図書館続きですが、『きけ、わだつみの声』(1950 日本)には東京大学総合図書館が出
てきます。『わだつみ〜』は近年織田裕二さんなどの出演で再映画化されたようですが、
この作品の方は終戦からわずか5年後ですから、戦争場面がとても生々しく感じられます。
激戦地だったビルマの戦場が舞台上で悲惨な場面がほとんどですが、戦地で再会した東大の
仏文の教授と学生の回想場面で図書館が出てくるのです。

・教授の最後の授業。モーパッサンについて講義しています。机を囲む学生は少人数で、
皆詰襟の制服を着ています。これだけを見てもよく分かりませんが、ここは図書館の中の
一室。学生の後ろの窓から安田講堂の時計台がちらっと見えます。

・図書館の二階に上がる大階段。赤絨毯のひかれた立派な階段です。目録カードのボック
スが並んでいるのも写ります。この階段やシャンデリアのある閲覧室などは今も当時の姿
そのまま西洋のお城のよう。戦地の悲惨な場面のなかにあつて、この図書館だけが知の
殿堂として静かな美しさを象徴しているように思えます。

・図書館の外観です。この建物は関東大震災後ロックフェラー財団の寄付で建てられたも

ので外観も立派ですね。映画の中では学生たちがこの外階段のあたりでビラをまく場面もあります。

『白い馬』(1995 日本)にはモンゴルの公共図書館が出てきます。舞台も登場人物もすべてモンゴルですが、実は日本製作の作品で監督は作家の椎名誠さん。「スーホの白い馬」の伝説を織り交ぜながら、草原の遊牧民・少年ナランの暮らしを描いています。

普段は草原で暮らす少年たちですが、時折買い物などのため馬で町に出ます。ナランは借りた本を返して新たに借りようとしている兄にくっついて、町の図書館にやってきます。

- ・カウンターで兄が図鑑のことについて尋ねています。対応している後ろ姿の女性職員は鮮やかな赤い民族衣装。この兄さんはずっとうちで寝ている体の弱い兄弟のために本を借りては読み聞かせてあげる優しい子なのですが、どうも小説などには全然興味を持たず、自分の好きな図鑑類ばかり借りるんですね。図鑑の説明を延々と読むのは本人は楽しいのかもしれないけれど、聞かされるほうはどうなのでしょう。向こうの隅のほうでナランは目録カードボックスをいじっています。調べるわけじゃなくて、物珍しいので引出を開け閉めしたいんですね。

- ・案の定引っくり返してしまいました。しかも二箱も引っくり返してますね。床にちらばるカード。ガタンっという大きな音がして皆がいっせいにそちらを見ます。図書館場面の定番。

- ・ここで閲覧机が写りますがちょっと目を引くのは、利用者が窓を背にして座っていることです。窓は明かり取りですから普通は窓の方を向いて座るような気がしますけど。それに細かい机で隣の仕切りもなく肩をならべて座っていますね。ちょっと窮屈そうに見えます。

- ・落としてしまったナランは思わず両手を合わせ、合掌のポーズで「ごめんなさい」とあやまるのが可愛いです。でも思うのですが普通利用者が使うカードボックスだったら芯棒が入ってあるはずですよ。こんなにカードがちらばるわけがない。この場合はむしろ芯棒を入れていない図書館員の方に非があると思います。

『囁く廊下』(1998 韓国)には韓国の高校図書館が何度も登場します。最近では韓国映画もメジャーになってきましたが、この作品はミニシアターで短期間のみの上映でした。公開当時は『女校怪談』というタイトルだったことから分かるようにホラーものですが、主眼となっているのは思春期の少女たちの傷つきやすさと友情で、その描き方が良かったです。

- ・これは木製の書架。別になんていうことはない、日本の高校図書館と変わらない雰囲気です。少々古びてあちこち傷んでいる感じですけど。

- ・優等生のソヨンという少女が新任の綺麗な先生と書架の間で会話しているところ。この先生はこの学校の卒業生で、いわばソヨンたちの先輩。美人で頭が良いことで有名だったひとです。ソヨンは成績は優秀ですがいささか一面的な考えの子で、大学で何を専攻するのかという先生に対し、「ソウル大にさえ入れれば学部はどこでもいい。合格したらもう本も読みません」とうそぶきます。

- ・彼女が話しながら適当に抜き出した作家ジェームズ・ジョイスの本を見た先生は、「でもソウル大でジョイスの本に親しむのも悪くはないわよ」と優しく語り掛けます。これは原書である英文の本のようですが、書架には背表紙が漢字で書かれたものも見え、混配し

てるのかなと思います。分類はどうなってるんでしょうね。KDCとDDC…ちょっと気になるります。全体に血なまぐさい場面も多い中で、この図書室での綺麗な女の子と綺麗な先生との会話はなかなか雰囲気がありました。

『Love Letter』（1995 日本）は岩井俊二監督の佳品で、大好きな作品です。小樽の中学校の図書室が重要な舞台として登場。現在と中学時代がカットバックで交互に進行していきます。同姓同名の男女「藤井樹（ふじい・いつき）」は中学の入学時に初めて出会います。同じクラスで同姓同名の男女だというだけで、皆のからかいの的。皆のせいで二人セット扱いで図書委員を押し付けられます。

・仕方なく彼女のほうは仕事をこなしています。このカウンターでやっているのはおそらくブックカードの作成でしょうね。「藤井くん、こっちやってください」と手伝ってくれない彼に声をかけますが…

・彼のほうは仕事もせずただ白いカーテンの揺れる窓際に立ち、本を読んでいるだけ。いっしんに読みふけっている顔は凛々しく、ちょっと見惚れてしまいます。この図書室は実在の小樽の中学校でロケされていますが、実際には書架は壁際だけあとは閲覧機だけだとか。映画ではたくさんの書架を入れ込んで、奥が見えない迷路のように仕立てています。

・貸出はニューアーク式。これはブックカードに利用者の名が残るので近年はどんどん廃止の傾向にあります。彼は誰も借りないような本ばかり借りて、カードの一番上に自分の名を残すことを楽しんでいるようです。自分の名だけが並んだカード数枚をトランプのように彼女に示し、「藤井樹ロイヤルストレートフラッシュ」と気取る場面もあります。

1995年はこの映画だけでなくスタジオジブリ製作のアニメーション『耳をすませば』も公開され、偶然にも両者ともにニューアーク式の貸出によって残るカードの名前が重要なきっかけになる作品で話題になりました。利用者のプライバシー保護の観点から図書館協会から抗議も出ましたが、これはカードなしには成り立たない物語だったと言えるでしょう。物語としては素晴らしく、余韻を残す作品だと思います。

ここでは中学時代の図書室だけご説明しましたが、成人したヒロインは小樽市の公共図書館に勤めていて、そこでの勤務ぶりも出てきます。ロケに使われたのは実際の図書館ではなく、旧日本郵船の建物だそうです。

駆け足で進めてきましたが、映画の中には実にさまざまな図書館があるものです。素敵な図書館、素敵な図書館員が出てくる作品を見て、多くの人たちが図書館に好感を持ってくださると嬉しいなと思います。映像のイメージは大きいものです。今日はどうも長い時間聞いていただいてありがとうございました。